



実施日平成22年7月21日 世話人 802 宇田 純夫

猛暑の中、31名もの会員がお集まり頂きました。蛇草会長は熱帯探検隊のスタイルで参加され行きはシャトルバス、歴史館にはすぐに入館でき、映像を楽しみました。

その後宇田班と弘津班に別れ、朱雀門へ向かいました。その後今年落成した大極殿まで約700Mを徒歩で、少し厳しい暑さでしたが、無事見学し、昼食場所の交流ひろばへ向かいました。

昼食後、近くの資料館を見学し、午後二時頃資料館出口で、解散、ガイドする方も、聞く方もそれなりの年配者で、これを老老ガイド称します。それにしても参加者皆さんお元気な様子には感心しました。

最後に判りやすい資料を重野氏が作成され、配布頂き有難うございました。

今回の報告は大極殿を中心に記載します。

第一次大極正殿と朱雀門の比較

[総高さ]

大極正殿 約27m
(朱雀門の約1.2倍)
朱雀門 約22m

[間口]

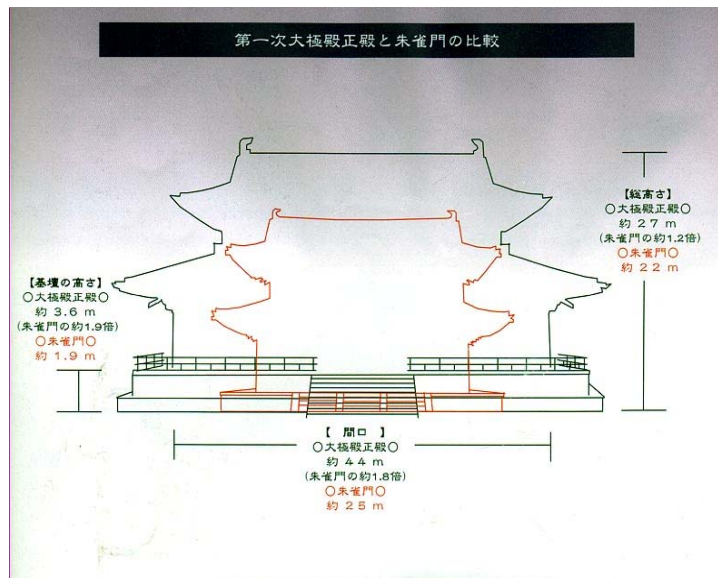
大極正殿 約44m
朱雀門 約28m

[基壇の高さ]

大極正殿 約3.6m
朱雀門 約1.9m

[建築費用]

大極正殿 約180億円
朱雀門 約40億円



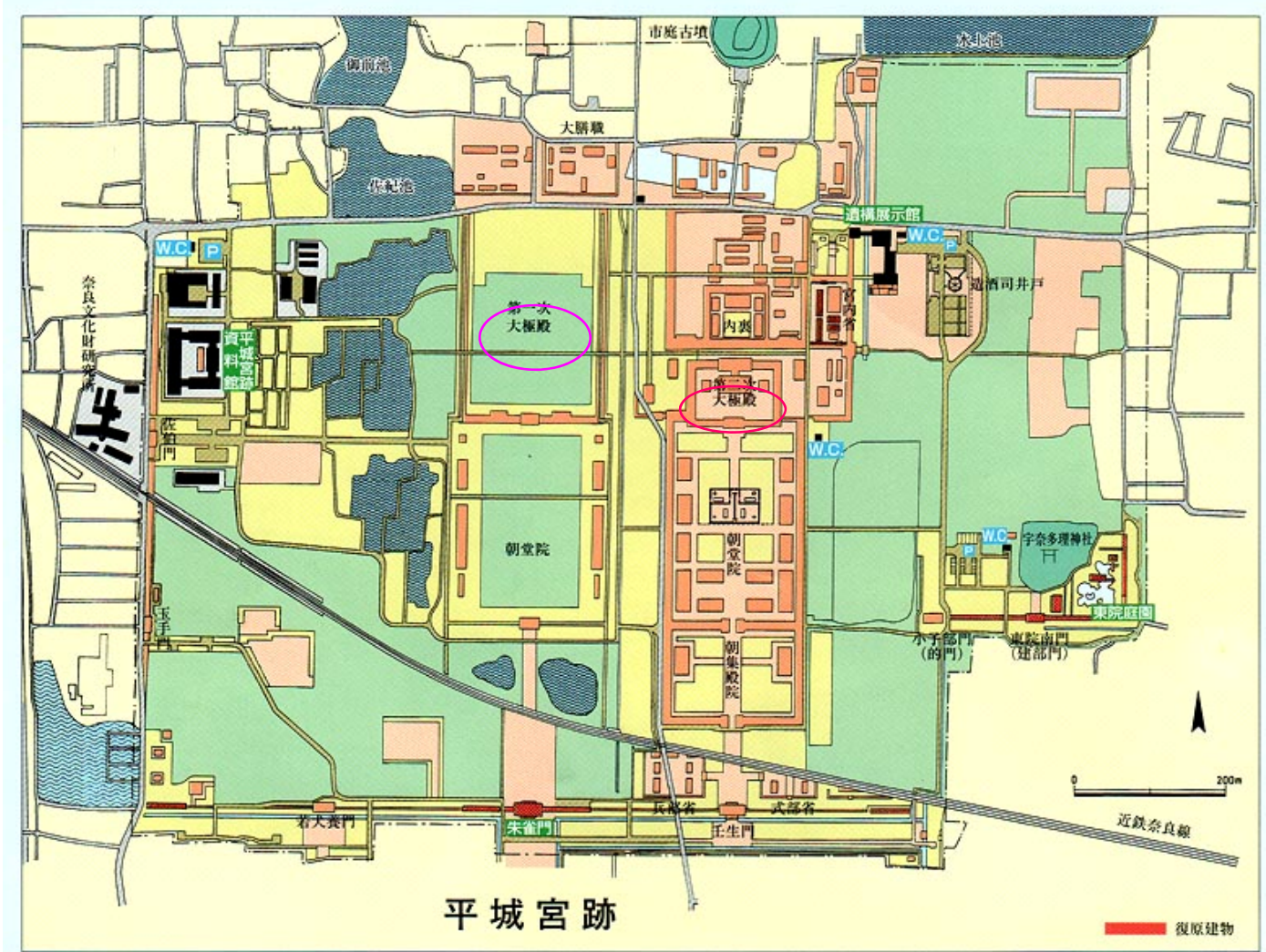
大極殿とは

大極殿とは古代の宮都における中心施設で、元日朝賀や天皇の即位など、国家儀式の際に天皇が出御する場所です。平城宮には、造営当時から恭仁京に遷都するまでの大極殿(第一次対極殿)と、平城京に還都してから長岡京に遷都するまでの大極殿(第二次対極殿)の二つの大極殿が確認されています。

第一次対極殿は、南北約320m、東西180mの区画で、北側を一段高くし大極殿と後殿を南北に配置します。壇の南側は儀式の際に貴族が整列した広場です。これは唐長安城大明宮元殿にならって造られたと考えられます。周囲は築地回廊で囲まれ、南側には南門とその東西に楼閣を構えていました。

第一次対極殿の建物は恭仁京遷都の際に回廊と共に解体され、移築されました。その後恭仁宮大極殿は山城国分寺に施入され、現在も当時の礎石が残っています。

奈良時代後半の第二次対極殿は、第一次対極殿のあった朱雀門の北側の区画ではなく、内裏のある東側の区画に造られました。この時期第一次対極殿のあった場所は大幅に改造され、称徳天皇の西宮として利用されることとなります。



平成17年第3回特別公開時の写真



第一層の天井



第一層底分

平成20年第7回特別公開時の写真



第一層屋根



第二層の屋根

第二層屋根

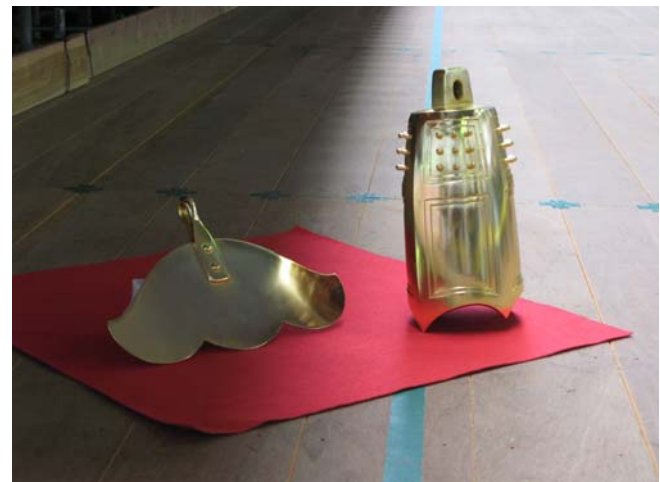


第二層の屋根



金 具

木口金物は、垂木、隅木、尾垂木の先端の腐食しやすい木口を保護するための金具で、装飾としての意味も持ちました。文様は、大官大寺出土隅木先金具を主に参照しつつ、奈良時代前後の文様の特徴を詳細に分析した上で、8世紀初頭にふさわしい宝相華文様として新たに描かれました。



金 具

風鐸は、上下角重の屋根の四隅にある隅木からつるされる金具で、金銅製です。鐘状の鐸身の内部から板状の風招が吊られ、風に揺られて音を奏でます。

鷗尾と大棟中央飾り



鷗尾は、大棟、降棟、降棟と妻との要に位置するもので、雨水の浸入を防ぐ役割を担いつつ、建築の格式を表現するものです。形状は初唐様式の影響の強い形に復原しました。宮内に出土がないことから、金銅製と考えられます。総高2.58mにおよびます。



大棟中央飾りは、同時代の中国にみられ、日本でも西大寺薬師金堂には載せられていました。大棟中央部の蓋が象徴的なものに変化したと考えられます。形は法隆寺東院夢殿の宝珠を参考にしています。

大極殿内部の形と写真



天井と支輪

天井は、身舎の全体にわたり、支輪で高く折り上げられて設けられています。天井桁の間に太い木材を格子状に組んで上に板を板を載せた組入天井という形式です。法隆寺金堂にならって天上桁のみで支持され、天井下に大梁が入らないため、一体性があり、上に高く立ち上がるような、大極殿にふさわしい内部空間となっています。支輪は、身舎の天井を斜めに折り曲げる部分です。上方にのびやかに立ち上がる天井廻りの空間を形成するとともに、奥行きのある深い大極殿の二重屋根の荷重を支える方杖の役割もはたしています。

四神の写真



東 清流



西 白虎



南 朱雀



北 玄武

天井彩

天井の格間には蓮華華文が、支輪板には蓮華を図案化した彩色が施されています。こだいの彩色は、暈縹彩色という、同系統の色を淡色から濃色に並列する表現によって描かれていました。この彩色文様の形と色違いをもとにしながら、上村淳之画伯によって描かれました。

小壁彩色

四周に巡る小壁には、彩色(壁画)が描かれていたものと考えました。画題は四神ならびに十二支と推定し、四神は各面の中央の束を挟んで対に描いています。すべて上村淳之画伯の手になるものです。



第一次大極殿



高御座

天皇が着座する玉座です。
文献資料等による検討を加え、概観のイメージを実物大で表現しました。上部を覆う蓋には、鳳凰、鏡などの装飾が付きま

遣唐使船

奈良時代を中心に、日本から当時の中国、唐に遣わされた外交使節、遣唐使が乗った船。当時の遣唐使船を原寸大に復元された船が展示されています。

遣唐使船の大きさは全長30m、最大幅10m、ますとを含めた高さ最大15m、乗組員150人、約150トン。
帆は網代帆で、竹や葦を薄く削った物を平らに編んで作った網代を縛って継ぎ合わせた帆です。



網代帆の説明を受ける榎さん



網代帆





集合写真(後は遣唐使船)